# やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。 咲 ―emi―

Pond e Ring

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

彼女の微笑みは、彼を救った――。

とある仕合わせが生み出したアナザーストーリー。

# 目　次

一話：別れ道 ―― 1
二話：揺れる ―― 12
三話：決意 ―― 20
四話：　似たもの同士 ―― 33

# 一話：別れ道

「――その、またあたしに付き合って欲しいんだけど」

突然の彼女の頼みに八幡は瞠目した。こういう類のものは「茶化されている」と受け取る彼であるが、彼の顔を離さず捉える切れ長の目がそのようなことは無いと伝えてくる。

――今、八幡は京都の太秦映画村に来ている。高校二年の秋、いわゆる修学旅行のシーズンである。また彼らも修学旅行で京都を訪れているのだ。

「……お化け屋敷に？」

「うん。京華と遊園地に行くことになってるから、どうしても苦手を克服したくて。もう一回、誰かと行きたいなって」

「え、なんで俺なんですかね……？」

「そりゃあ、さっきあんた平気そうだったし」

彼女――川崎沙希はぷいと顔を逸らした。一際目を引く水色のポニーテールが秋の淑やかな風に靡いている。

「あー、なるほどな。でも、今日は――」

「あ、ヒッキーいたっ！　あっち行こ！　ほら早く早く～！」

周囲の目も気にしない一際溌剌とした声が八幡の耳に届いた。その声の主は、由比ヶ浜結衣。誰よりも天真爛漫で、そして優しい女の子だ。

「お呼びがかかっちまった。というわけで、川崎申し訳ない。他の人を頼ってくれ」

「……そう、別にいいよ。こっちこそ気を遣わせて悪いね」

そう言うと、川崎は八幡にくるりと背を向けて、逆の方向へと歩き出した。

「え、今、もしかしてサキちゃんとお取り込み中だった……？」
「いいや、何にもない」
「そっか！　ヒッキー、あっちに行こっ、あの二人探さなきゃ！」
「おう」

いつものように背中をくるりと丸めた八幡は、足取り軽やかに進んでいく由比ヶ浜の後を着いていく。江戸時代の街並みだと言うのに、最新の流行曲を躊躇(ためら)いもなく口ずさむのは、彼女らしい。

あの二人とは、彼らのクラスメイトの海老名姫菜(えびなひな)と戸部翔(とべかける)のことであった。

戸部は海老名に告白する手伝いをして欲しいとの依頼を、そして海老名からは――。

いわゆる最高のハッピーエンドが限りなく不可能であることは、八幡も由比ヶ浜も既に知っている。

だが、彼女は諦めていないのだ。一縷(いちる)でも望みがあれば、みんなが笑顔になる方法を探し続けようとする本当に優しい女の子なのだ。

「あれ～、どこ行っちゃったのー」

二人を探しながら、しばらく歩いていると、時代劇に見られるような忍者が散見される通りに差し掛かった。おこそ頭巾(ずきん)という特徴的な被り物はそれぞれが違う色が施されており、カラフルに江戸時代の街を染めている。

今ではすっかり日本の象徴ともなっている忍者。であるが、実は忍者というのは確かに実在したのだが、現在のイメージは後世の浮言(ふげん)が物語に昇華し広く浸透したものである。そう知ったのは、いつか読ん

だ小説の一節で、このように忍者の存在に少し違和感を覚えるほどの置き土産を残していった。

――知らなくても良い事もある。ただ、そう理解しているのに、知りたがってしまうのだ。これは彼に限った話ではなく、全人類共通の宿命というやつだろう。

丁度からくり忍者屋敷の手前で由比ヶ浜は突然立ち止まった。八幡の方へすっと振り返ったその顔は、まるで強請(ねだ)る子供のようだ。

「……入りたいのか？」

「うん！　さすが、ヒッキー、言わずとも伝わるんだ！」

「まぁ、子供の扱いにはわりかし自信があるからな。時間も時間だし、早速行くか」

「分かった！　……って、ヒッキーそれどういゆうことっ?!」

「ほれほれ、行くぞ」

「もー、ヒッキーのアホ！」

ある種の定型文のようなやり取りは、まるで二人だけの暗号のようでもあって、ベールのように覆い包む。

「楽しかったー！」

「あぁ、そうだな」

忍者屋敷から出てきた由比ヶ浜は、ご機嫌そうにうんと大きな伸びをする。すると浮かび上がる胸元の大きな膨らみが詮方(せんかた)無く視界に入り、吸い込まれそうになるのを抑えて、視線を逸らした。

「……ね、ヒッキー」

冷や汗が一筋頬を伝う。反射的に見入ってしまう男の宿命を呪わざるを得ない。

「な、なんでしょう、由比ヶ浜さん……？」
「え、急によそよそしい！　じゃなくて、あの二人大丈夫かなぁ……？」

八幡の取り越し苦労であった。胸を撫で下ろすと、いかにも平静を装う。

「……ま、何とかるだろ」
「うん、ちゃんと二人が笑えるように手伝わなきゃ。あ、二人居た！　尾行再開っ！」

由比ヶ浜はありもしない眼鏡をくいとあげる所作をしてみせた。きっとドラマで良く見る探偵像を鵜呑(うの)みにして、こうしているのだろうが何とも阿呆らしい。しかし、これが彼女の変え難い魅力であることも確かである。

――『アホの子探偵　由比ヶ浜結衣』これは、中々、作品としていけるんじゃないか。うん、一〇万部は堅い……。

と、無駄な思案をしている内に、由比ヶ浜は先に行って、八幡に向かって無邪気に手招いている。

「ヒッキー、ほらっ、こっちこっち！」

――そんな大声出したら尾行の意味がないだろと諫言(かんげん)を飛ばすのは野暮だ。
季節外れの満開の笑顔を咲かせる由比ヶ浜を見ると、意識せずとも胸が弾む。

「ねぇねぇ、ヒッキー、今度はさ」
「ん？」

「私たちだけで、旅行行こうね――」

八幡は目を白黒させて、由比ヶ浜の横顔を見やった。すぐに言葉の意味に気付いたのか、「も、もちろん、ゆきのんも一緒にね！」とあたふたしながら捲(まく)し立てる。その様子に思わず八幡の顔が綻(ほころ)んだ。

八幡は高校生活を教室の隅で一人で終えると思い込んでいた。それまでに積み重ねられた人に対する失望、絶望というものが一緒くたになって厭世(えんせい)観が心根に沁みていたのだ。

しかし、高校二年生の春、彼の事を気にかけた平塚先生に奉仕部という何とも奇妙な部活に入部させられてから、彼の世界は大きく変わった。

今、目の前で屈託のない笑顔を見せる可憐な少女――由比ヶ浜結衣。そして誰よりも気高く常に凜然(りんぜん)としており、高嶺の花の言葉が最も良く似合う美少女――雪ノ下雪乃(ゆきのしたゆきの)。

二人との出会いによって、八幡は変わった。否、変わってしまったのだった――。

▲▽▲▽▲▽▲▽

不気味なほど透き通った青空。人気のない京都駅の屋上。八幡の眼下に広がる京都市街。京都旅行もいよいよ終わりを告げ、帰りの新幹線を待つ休憩時間に差し掛かっている。

本来であれば楽しい思い出で溢れ、それらについて回想しているはずなのだが、彼の瞳はどこか虚(うつ)ろで、生気がない。

――それは昨日の夜の出来事だった。嵐山の竹で覆われた小道は、脇に並べられた燈籠(とうろう)によってその道筋を露わにしている。そこには息を潜め、固唾(かたず)を飲んでその様子を見守るいくつかの人影があった。

戸部が海老名にまもなく告白する。しかし、その瞬間、八幡は竹藪(たけやぶ)の影から、突然飛び出し、海老名の前に立った。そして、大きな声で

一言――。

『――ずっと前から好きでした。俺と付き合ってください』

その瞬間、この依頼は円滑に解決した。否、させてしまったのだ――。

その後、竹藪の陰から出てきた雪ノ下、由比ヶ浜両名には八幡への歓待の様子は毛頭ない。

『――あなたのやり方、嫌いだわ。上手く説明できなくて、もどかしいのだけれど。あなたのそのやり方、とても嫌い』

凛としながら、澄んでいる美しい双眸(そうぼう)は厳しく八幡を貫いていた。

『――人の気持ち、もっと考えてよっ……！　なんで色んなことが分かるのに、それが分からないのっ……?!　ああいうの、やだ……』

その大きく可憐な円い瞳は、その形を歪めて、大粒の泪を堪(こら)えて、八幡に悲痛を訴えていた。あの弾ける笑顔は、もう幻であったように思い出せなかった――。

――そして今から丁度一〇分ほど前に、一人の同級生が黄昏ている八幡の元を尋ねた。そもそもここに彼がいるのは彼女に呼びつけられていたからだった。

『ハロハロー、お待たせしちゃった?』

彼女は、今回の依頼人である海老名姫菜だ。彼女は御礼がしたいと告げたが、その実は彼女の行為に対する告解(こっかい)であった。軽口でありながらも、滔々(とうとう)と言葉を紡ぐ彼女は、まるで稀代(きだい)の嘘つきであると自分自身を称して、刃を喉元に向けているようだった。

『――だから、私は自分が嫌い』

しかし、その言葉たちを聞いて、八幡は強く感じてしまった。一番の嘘つきは、自分自身だ、と。

葉山や戸部たちの関わり合いを遠巻きから見て、最も忌避する青春だといって、ある種見下していた。しかし、この半年で、同志で気高き雪ノ下雪乃が、素直で優しい由比ヶ浜結衣が、八幡の中に穏やかに染み入るようになっていた。そして、彼は気付けば分厚い仮面を着けて道化を演じ始めていた。知らない間に傷つかないように、馴れ合い始めてしまったのだ。

だからこそ、守ってしまった。葉山達のグループが戸部の告白をきっかけに瓦解(がかい)してしまったならば、それは八幡達に起こりうる未来であるからだ。それを自らの手が変えたかったのだ。それほどまでにあの奉仕部という場所が、二人の女の子が大切になっていたのだ。

だが、八幡は決定的に間違えてしまった。最良の策を講じたはずで、葉山達を守ることができたはずなのだが、傷付いたのは奉仕部の方で、ガラスに入った罅(ひび)のように修復不可能であるかもしれなかった。

後悔先に立たずという。後の祭りともいう。先人も多くの後悔をしてきたのだろう。だが、答えを見つけ出せば、それは糧(かて)と言われる。

しかし八幡は今回答えは導き出せない。だからこうして立ち尽くしかなかったのだ。

八幡が携帯を開いて時刻を見ると、その時刻はもう集合予定時刻の五分前だった。鉛(なまり)のように重いその足を動かそうとした時だった。

「比企谷」

再び名前を呼びかけられて、反射的に振り向く。そこには、

「川崎か……、どうした」

「あんた、本当にこんなとこにいたんだ。えっと、それでね……」

んんっと、軽く咳払いをすると、彼女は周りに目をくばって、胸に手を当てていた。少しつり上がった切れ長の目は、どこか緊張に彩られ、その面持ちは強ばっているようにも見えた。

「あ、あのさ……」

その異様な雰囲気は、感情の機微に疎い八幡にも察せられ、身構えた。

「……文化祭の時に、愛してるぜ、って私に言ったじゃん――」

「――え、俺そんなこと……」

咄嗟の反応は、間違いなく悪手だとすぐ自認した。川崎は何かが抜け落ちたように、顔の強ばりが消える。

八幡には覚えは無いが、きっと発言しているのだと川崎の様子が示していた。

「……やっぱりそうだよね。一応、確かめたかっただけ」

「……いや、その、マジですまん。気持ち悪かったよな。他人の気持ちも考えずに無責任なこと言った」

つい口を衝いて出た言葉は、詭弁も欺瞞もない言葉そのもの。

『どうでもいい人には素直だよね』

海老名の言葉が否応にも反芻され、空いた心の傷を更に深く抉っていく。だから、彼の口からは、壊れた機械のように謝罪の言葉だけが繰り返された。

「気分を悪くさせて、本当に申し訳ない……」
「ちょ、ちょっと待ちな。別にあたしも分かってたから。あんたが深く考えて言ってないってのも。大体あんた、こういうの凄く慎重だろうし。これは一応の確認ってだけだからさ」

川崎は見るからに自責の念に駆られてしまっている八幡を宥(なだ)める。そして少し間を空けて、また彼女は口を開いた。

「……えと、本当はあんたに頼み事があって来たんだけど」
「頼み事、か……」

その響きに僅かだが眉が顫動(せんどう)する。それは、もはやトラウマに近いものがあった。

「うん、千葉帰った後、予定が合えば何時でもいいから京華に会ってあげて欲しいんだけど」
「え、そういうことか」

その依頼内容を聞いて、肩の荷が降りるといった感じで、全身の力が抜けていった。修学旅行の数日前に、八幡は川崎沙希、そしてその妹川崎京華と邂逅(かいこう)した。あの純粋無垢の塊のような存在に、思わず腐っていると評される目も浄化される程であった。

「この前のことあるでしょ？　その、あれで結構、比企谷に懐(なつ)いてるみたいでさ……。凄く会いたがってるんだよ」
「あ、あぁ……。分かった」
「あんまり気が乗らない感じ……？　全然無理なら断ってくれていいんだけど」

少し覗き込んで、こちらの顔色を伺う川崎の目には、明らかに配慮というものを差し向けていた。昨日提案されていたならば、答えを求

められるまでもなく、恐らく飛びついていた。だが、私的な気分のせいで、少し言葉に詰まってしまったばかりに、また余計な心配を掛けてしまったのだ。

「いや、悪い。ちょっと考え事しててな。俺もけーちゃんに会いたいしな。一刻も早く。いや、一刹那でも早く」

「ぷっ、ふふっ――」

川崎は怪訝（けげん）な表情を崩して、微笑みを湛（たた）える。その姿を見て、ほんの少しではあるが八幡の胸が軽くなった。

「ありがと、比企谷。じゃあ、また日程とか合わせたいから連絡する」

「あぁ、よろしく頼む」

川崎はその答えを聞いて、満足したのか再び柔和（にゅうわ）に微笑むと、くるりと背を向けてエスカレーターの方へと歩いていく。

八幡が周りの環境のせいで、麻痺してしまっている部分もあるのだが、川崎はお世辞抜きにして、とても美人な女子であった。女の子というよりは姉御さんと言った方が正しいのだろうが。更にその後ろ姿からも程よく締まった肉感的な脚と、凸凹（おうとつ）がはっきりと分かるブレザーの浮き具合が、彼女が高校生離れした抜群のプロポーションを誇ることを見せつけていた。

ただ八幡が後ろ姿を見返しながら思い返すのは、そういう性的な類の事では無く、家族の前で見せていたあのとびきり優しい表情であった。八幡は思わず見蕩（みと）れてしまい、こうして思い返してしまう程には忘れられなかったのだ。

不意に呆然自失（ぼうぜんじしつ）となっていたが、気付けばエスカレーターに向かっていたはずの川崎は一度立ち止まって、こちらを振り返っていた。

「余計なお世話かもしれないけどさ」

少し間が空く。優しく温(ぬく)い秋の風がこの場を通り過ぎた。

「あんたが困ってる事あったら、あたしに相談してよ。あたしも暇だし、できる限り力になるから」

その時、思わず身体の奥底から込み上げるものがあった。目頭が熱くなりそうになるのを当然抑え込んで、首肯(しゅこう)で答える。川崎は、また、微笑んだ。ただ、それはまさしく、八幡が見蕩れたあのとびきり優しい表情で――。

「――待ってる」

# 二話：揺れる

修学旅行という人生に一度の非日常の後に、必ず訪れる極めて坦々(たんたん)たる平日。特に天候も荒れることなく、鮮やかな鰯(いわし)雲が彩る晴天である。テレビを点けるとニュースキャスターが朝早くのお勤めゆえか、やや季節外れの厚手のコートを着込んでいる。

寒冷前線の影響に注意と真剣な様相で伝えるが、世間の人は棚の引き出しの奥からマフラー一枚かカーディガン一着を引っ張って、着込むかどうかを悩むぐらいしかない。

ただ、八幡は酷く悩んでいた。そして学校に登校するのも億劫(おっくう)であった。修学旅行の一件で、間違いなく奉仕部の二人との間に軋轢(あつれき)が生まれてしまっていたからだ。二人それぞれの糾弾する言葉と、ぐしゃりと歪めた顔が脳裏にこべりついて離れることは無かった。

彼はマイナス思考を思考の外に弾き出すために、茶碗一杯分の白飯を一心に口にかき込む。

「お兄ちゃん、何かあった……？」

不意の言葉に、矢も盾もたまらず噎(む)せた。その言葉は、目の前に座る彼の妹――比企谷小町から発せられたものだった。

「いや、別になんもねぇよ」

「絶対、うそだね。目、死んでるもん。雪乃さん達と何かあったでしょ。ねぇ、教えてよ」

「だから、何もねぇって」

「ふーん」とその見透かしたような態度は、彼の顔の青筋を浮き上がらせるには十分だった。

「シラ切るんだ」

「……だから何もねぇって。うるさいな」
「何その態度」
「うるさいのは事実だから仕方ねぇだろ。それに普通にうざったいし」
「あっそ、もう知らない――」

▲▽▲▽▲▽▲▽

先程のキャスターの寒がりは演技ではなかった。悴(かじか)む手でハンドルを握っていつもの道を漕ぎ進む。ただ後ろに座って立場も弁(わきま)えず、罵倒する妹はいない。周りの環境音に耳を傾けることもなく、まるで一人だけ別世界にいる感覚が久しぶりに彼を襲った。
柔らかい朝日が注ぐ廊下を歩く。制服を身に纏(まと)っただけの人々が、騒がしく笑いあっている。
青春は嘘。吐き捨てたあの言葉が再び八幡の頭を駆け巡る。ただ、彼もその青春という甘美な毒に侵された内の一人だと気付かないふりをしながら、だ。
教室に入れば由比ヶ浜は、またあのグループの輪の中に入り、楽しそうに会話していた。彼女には、確(しっか)りと居場所があるのだ、と痛感させられる。そして、彼には見せない別の顔がある事実に思わず目を背ける。
その背けた先は、窓側の前方から三列目。ちょうど川崎が一人で座っていた。が、何故か彼の方を睨(ね)め付けていた。

「……」

形容しがたい気まずさに八幡は、視線をすぐ外すと、そそくさと席に向かった。
――日常が流れるのは早い。特に面白味のない授業を受けて、昼休みになれば一人で購買部のパンを齧(かじ)る。そして、午後は眠気に襲われ

る。だが、八幡にはその早さが居心地悪く感じられた。
お天道様もすっかり赤橙(せきとう)に色濃く染まる放課後。いつもなら躊躇(ためら)うことなく開けていた一枚の引き戸。八幡はそこのノブに手を置いたままで、しばらく立ち尽くす。夕映えは彼を隠すように、優しく影を落とす。
引き戸に耳を当てると、二人が既に中にいて会話しているのが聞こえてきた。

「……」

やや強く唇を噛み締める。そして、極めて厚く重い扉を開いた。

「それでねっ！　あ……」

何かを話そうとしていた由比ヶ浜は、扉を開いた八幡に気付いた瞬間に、明るい声を詰まらせ、まるで悪事をすっぱ抜かれたかのように硬直した。
そして、その奥、いつものお誕生日席に座る雪ノ下は、動揺の色を見せることなく、朗らかだった目を釣りあげて彼の顔を貫く。
この分かりきっていた静寂は、彼の胃をきりきりと軋ませる。ティーカップから漂う真夏の草いきれに似た香りが鼻腔(びくう)を突く。しかし、いつもの様に彼の前に、紙コップに入った紅茶が差し出される素振りは無い。

「来たのね」

その静寂を切り裂いたのは、雪ノ下の一言だった。この言葉はやはり歓迎ではなく、もはや一種の糾弾であった。

「まぁな」

それしか言葉が見つからなかった八幡は、平静を装いながら指定席となっている椅子を引き寄せた。その椅子に座ると、鞄からは小説を取り出し、適当にページを開いて、目を凝らす。

「……」

再び静寂が訪れ、彼は完全に腫れ物扱いだった。その時、「あ、あのさ……」とそれを壊そうとしたのは、やはり誰よりも優しい由比ヶ浜であった――。

▲▽▲▽▲▽

奉仕部は揺れた。

由比ヶ浜が声を振り絞って、三人を繋ぐ細い糸を紡(つむ)ごうとした。しかし、彼らの関係はそれで修復する類のものではなかった。いわゆる儚く淡い輝きを放つ硝子(ガラス)玉だったのだ。それは揺れて、落ちて、罅(ひび)を入れた。

そのような奉仕部に『一色いろはの生徒会長当選を阻止せよ』という次なる依頼が舞い込んだ。そして、それは硝子玉の罅を深く、大きくするものだろうと彼らは各々勘づいていた。

――薄暗がりの下、独り立ち尽くす自動販売機に手を伸ばす。そして、八幡は慣れない温かいブラックコーヒーを買って、口に入れた。苦いと呟くと、それを一気に呷(あお)って、空の缶を作り出した。

色々忘れさせてくれることを期待して、大人の猿真似をして見たが、この辛さは苦味と共に飲み込まれることなく、彼の喉元に留まり続けた。徒労(ところう)をため息を一つで吐き出すと、彼は駐輪場の方に向かって歩き出した。

蛍光灯一つで灯りを賄(まかな)っている駐輪場。夏場はあれほど虫が湧いていたのに、寒さにやられたのか物の見事に消え失せてしまってい

る。
そこには、両手を組んで、恐らく棚から引っ張り出してきたであろうマフラーで口元を覆いながら、佇(たたず)んでいる青色の髪の少女だった。
「え」
「あっ……」
思わず声を漏らすと、川崎も釣られたように声を漏らす。朝に睨みつけられて目を逸らしたこともあり、八幡にはどこか気まずかった。
「ども、じゃ」
「ちょ、ちょっと待ちな」
八幡は軽く一言済ませて、通り過ぎようとすると、その首根っこを引っ張られた。「ぐえっ」と蛙のような情けない声を鳴らす。その後、二人は人気のない駐輪場の隅に移動した。川崎はその覆っているマフラーを外し、寒さで若干赤らんだ頬を露(あらわ)にした。
「ごほっごほっ、めっちゃ痛いんですけど」
「ごめん。でも、あんた、そうでもしなきゃ逃げてそうだし」
「んまぁ、確かに。というか重役出勤定時退社で有名な川崎さんが、何でいらっしゃるんですかね。学校で用事でもあったのか？」
「それは――」
目を伏せて、一瞬躊躇(ためら)いを川崎は見せた。しかし、直ぐに顔を上げると、今度は、切れ長だが温かみのある優しい目をこちらに向けて、
「――比企谷のこと待ってたから」
恥ずかしげもないその川崎の言葉に、八幡は、照れよりも驚きと心配が勝った。

「は……？　今日こんなに寒いのにか」
「あたし、今日暇だったし、そこにあんたの自転車もあったから。それに――」

今度は躊躇いが勝ったのか、きゅっと固く口を結ぶ。

「やっぱ、何でもない」
「そうか。……というか、そもそも論で待つ必要が無いでしょ」
「そしたら連絡取る手段ないから、あんたと京華と遊ぶ日決められないし。取り敢えず日にちだけは早めに決めておきたいと思って待ってた」
「あ、そういうことか。確かにまだ決めてなかったか。待っててもらって悪かったな」
「ううん、いいから。あたしが勝手に待ってただけだし。じゃ、早速始めよっか」

そうして話し合いが始まったが、二人とも生粋のぼっちということもあり、今週の日曜日にあっさり決まった。

「時間とかはまた後でいいって感じだよな？」
「うん。でも、やっぱすぐ連絡取れないと、何かと不便だね……」

川崎は口元に手を当てて、はぁと息を当て、暖をとっている。彼女の言うことは最もであったが、八幡にとっては、かなりの決心ではあったが、背に腹はかえられぬ。ということで、スマートフォンの画面を開いて、

「……一応、最近流行ってるらしい便利なＬＩＮＥっていうメッセージアプリがあるが。ガラケーでもできるっぽいし。嫌じゃなければ交換してもらえれば」

「ふふっ、奇遇だね、あたしも実は同じ事言おうと思ってた。それにあたしはむしろ嬉しいし、交換しよっ」
「そ、そうか……。じゃあ早速」

八幡はＬＩＮＥを開いたが、いかんせん初めての友達追加であるため方法が分からなかった。顰(しか)めっ面で助けを求めるように目の前の川崎を見やると、川崎も同じように眉をひそめで困り果てているのが携帯の光に照らし出されていた。普段は凛凛(りり)しく、どちらかと言うと仏頂面(ぶっちょうづら)な彼女の見慣れない面持ちに、思わず見入ってしまう。その最中、振り向き、目が合った。気恥しさよりも、可笑しさが共有され、二人して吹き出した。

「ふふっ、そっか、あんた友達少ないもんね」
「お互い様にな」
「妹に教えてもらった感じ？」
「そうだ。お前も大志、いや違う。人の妹を誑かす弟に教えてもらった感じか」
「〆ていい？」
「いえ、冗談です」

軽口を交わしながら、二人で手探りで進める。

「これで、いいんだよな」
「うん、多分」

情報を入れて、ボタンを押すと、無邪気に笑う弟妹(ていまい)達が写る川崎のＬＩＮＥのアイコンが出てきた。

「お、さすが、千葉を代表するブラザー＆シスターコンプレックス様だ」
「や、やめてよ。どうせあんただって。って、あれ違う。猫だ」

「ふっ、甘いな。俺は気持ち悪いからやめてって真顔で言われたから、飼い猫のカマクラにしてるんだ」
「あははっ……！」

川崎は珍しく笑壺（えつぼ）に入っているようで、お腹を捩（よじ）らせている。そして「馬鹿なんじゃないの」と目尻を拭う姿を見て、先程まであった重苦しい気分が流れていく感覚があった。

そして、あの柔らかく優しく笑う顔に、再び見蕩（みと）れてしまっていた。

「ん、どうかした？　ぼーっとしてるよ」
「いや、何でもない」
「そっか、じゃあ時間はまた後で、ＬＩＮＥで送るから」
「あ、あぁ、分かった」

もはや冬を感じるほど寒いというのに、不思議と温められた心。そして、不気味なほど蠢く拍動。

いつの間にか、川崎は自転車に乗っていた。その鼻から口元までをマフラーで覆っていた。そして、こちらに軽く一度手を振って、行ってしまった。

すぐ後に、スマートフォンが珍しく揺れた。開くと、そこには短く

---

「よろしく、比企谷」

# 三話：決意

灯りが落とされた淋(さみ)しい玄関。目の前のインターフォンを八幡が押しても、その扉が開くことは無い。八幡は空き巣の如く、音を立てないように、そしてこの家のものではないかのように、ゆっくりと鍵を差し込んで入った。

「……ただいま」

彼の低く鈍く小さい声ですらも反響して、耳元に返る。この廊下の左側の部屋からはうっすら光が漏れている。そこは、妹の小町の部屋だ。喧嘩をして以来、口を聞いていない状態がずっと続いている。

その反対にある自室に入って、制服姿のまま、灯りを点けることもなく、柔らかなベッドへと雪崩(なだれ)込む。

雪ノ下陽乃(はるの)による翻弄(ほんろう)、葉山隼人に向けられた同情、そして奉仕部に着実に忍び寄る決壊――。

それらは、彼が繋がりを求めたことによる戒(いまし)めなのだろうか。彼が嘘をついたことによる罰なのだろうか。どうしたら赦(ゆる)されるのだろうか。一人になると、そのような考えが幾度も反芻(はんすう)される程に、彼は追い込まれていた。

『君自身を犠牲にするのは、やめないか……？』

――やめろ

『君が誰かを助けるのは、誰かに助けられたいからじゃないか？』

――やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ

葉山の問い掛けは、その核心をついているようで、嬲(なぶ)ってくるような気持ち悪さを纏(まと)っていた。ただ、八幡はそれを否定できず、拒絶するしかできない。

「何で俺は、いつもこうなるんだ……」

いつもの彼なら悲劇の主人公気取りだと、自蔑(じべつ)していただろう。しかし、思わず漏れ出たその声に、彼は気付かなかった。そして、棘を携えてまとわりつく現実から離れるように、眠りに落ちた。

――目を覚ますと、どれほどの時間が経ったが分からないが相変わらず部屋は闇に包まれたままだった。ただ、その中に一閃の光が八幡の枕の下から漏れ出ていた。それは彼のスマートフォンからのものであり、手に取ると、

「比企谷、お疲れ様。日曜日の時間なんだけど、京華が結構あんたと遊びたいみたいだから、お昼の後すぐで良い？」

「1時とかどう？」

川崎からのＬＩＮＥのメッセージが届いていた。アカウントを交換して以来のメッセージであり、八幡はもたつくほど急いで手に取ると、

「分かった」

「けーちゃんのためなら幾らでも付き合う」

慣れたフリック操作で器用に打ち込んで、送信した。すると直ぐに既読のマークが付き、

「それは頼もしいね（笑）ありがとう」

「私の家、待ち合わせで良い？　住所これだから」

彼は送られた住所をコピー＆ペーストして、メモ帳の隅に保存した。「了解」と手短に返した後、ようやく真っ暗な部屋を出て、すっかり冷めた夕飯を食べることができた。

――次の日の放課後、八幡は奉仕部の顧問である平塚静（ひらつかしずか）に呼び出された。煙草の匂いが充満する喫煙室で平塚は、雪ノ下が生徒会長選挙に立候補しようとしていることを告げた。　ただ昨日の雪ノ下姉妹のやり取りを見ていた彼にとっては、「そうなんですか」と驚きを顔に出すことは全く無かった。とはいえ、陽乃の思惑通りに進んでしまっていることが気に食わなかった。

「お前、生徒会長選挙立候補するらしいな」

沈黙と平静を装っている部室の中での八幡の発言は、爆撃さながらの衝撃をもってそれらを引き裂いた。由比ヶ浜に至っては予想外であったようで、目を白黒させて驚いた様子を隠せないでいる。ただ、雪ノ下だけは平静というベールを保ちながら、面持ちを変えることなく、あたかも彼女が絶対的であるかのように答える。

「えぇ、そうよ」

「いくら陽乃さんに言われたからって――」

その言葉が雪ノ下の癪（しゃく）に触ったのだろうか、被せるように語気を荒らげて、

「――違うわ。これは私の紛れもない意志。実際、私が出れば生徒会長選挙には勝てる訳だし、一色さんもいびられることはなくなるわ。それに私自身、生徒会長をやってもいいと思っている」

すると口を出さなかった由比ヶ浜は、大層不安げに雪ノ下に問い掛

けた。

「でも、ゆきのん、そしたら部活はどうなっちゃうの……？」

「大丈夫、私は両立できるから。生徒会の活動も大方理解しているし、この部活動も忙しくないから平気よ」

雪ノ下の決意は固かった。それを物語る、その勿忘草（わすれなぐさ）の花ような透明で明るい青に彩られた双眸（そうぼう）が、いつでも正しいと彼女の言葉こそ正しいと思わせる。

出会った当初であれば、『任せても大丈夫だ』と八幡は雪ノ下に託していたかもしれない。しかし、彼女の事を知り始めている今の彼にとっては、由比ヶ浜の憂慮の方が、より彼には共感することができた。

「だが、それだとお前の負担が大きい。戦わないことだってできる」

「あの方法でやるというの？」

「あぁ」

「貴方の一挙一動で全校生徒が動くとでも思っているのね」

雪ノ下は、冷たさの中にどこか呆れを含んだ眼差しで、八幡を射抜いた。

「でも言っておくけど、それは自意識過剰、あなたの完全な思い上がりよ」

――八幡は下駄箱に向かいながら、頭を巡らせていた。雪ノ下と対立することが決定的となった今、彼女の立候補よりも優れた解決案を導き出さなければいけない。しかし、一度考え込むと、どんどんと底の見えない沼に嵌（はま）っていた。次第には追い込むように昨日の夜の山積みとなった問題が思い起こされ、のしかかる。

「ちょ、ちょっと待ちな」

これはまさしくデジャビュか。首根っこを捕まれ、後ろ向きにぐいと引っ張られた。あまりにも突然の事だったので「ぐわ」と以前より蛙に近い情けない鳴き声を漏らした八幡は、その場で噎(む)せ返った。

「今度は気付いてもくれないんだ」

「考え事してたんだ。だとしても、引っ張るのは無しだろ、ごほっ……」

「ご、ごめん、なんか空手やってたから癖で」

「なるほど、とはならない。何なら首根っこ掴むの、空手じゃなくて柔道では」

「ナイスツッコミ。さすが比企谷、頭の回転早いんだね」

「ま、まぁな」

何だか川崎に上手く調弄(はぐらか)されてしまったところで、「ヒッキー!」と聞き慣れた声で廊下の向こう側から呼ばれた。

そちらへ振り返ると、由比ヶ浜が一人で、茜(あかね)色に染る廊下を走ってくるのが見えた。

「あれ、なんで沙希ちゃんがいるの?」

「たまたま会ったんだよ。そっちこそどうしたんだ。珍しく雪ノ下を置いて走ってきて」

「えと、いや、あのー……。ちょっとヒッキーに言いたいことがあったから急いで来たんだけど、二人は取り込み中な感じ?」

由比ヶ浜は、二人に気を配って、分かりやすい俄(にわか)作りの笑みで尋ねてくる。「いや、別に」と八幡が答えるよりも早く、

「うん、そうだけど」

川崎のあまりにつっけんどんな返答に八幡は瞠目(どうもく)する。由比ヶ浜は、「あー、そっかそっかー。だよねー」と気にしないような素振りで答える。

「ごめんね、邪魔しちゃって……。別に大したことじゃないから、週明け伝えるね！　じゃあ、二人ともバイバイ」

そう言って、そのまま由比ヶ浜はいそいそと下駄箱に駆けて行ってしまった。

「私たちは駐輪場まで行こっか」

「お、おう……」

二人は駐輪場の隅、先日ＬＩＮＥを交換した場所まで向かった。八幡はどうしても先程の川崎の対応が気になり、問い掛ける。

「なぁ、川崎は由比ヶ浜のこと、避けてるのか？」

「え……、別にそんなことないけど。由比ヶ浜が何か言ってた？」

「いや、さっき由比ヶ浜に結構あたりキツめだった気がしてな」

「あー、そういうことね。まぁ、実際取り込み中なんだし、あたしは比企谷と二人きりで話したかったから。それと、別にきつく言ったつもりは無いし、自分で言うのもあれだけどいつもあんな感じでしょ」

川崎の言う通りだった。八幡は、ここ最近彼女の違う顔を見てしまっているばっかりに違和感を覚えたが、このけんもほろろな振る舞いがデフォルトであったのだ。つまり杞憂(きゆう)という訳だった。

「なるほどな、すまん、早とちりだった。で、その二人だけの時しか話せない用事は何。けーちゃんの事か？」

「いいや、違うよ。えーとね」

肩にかけられたスクールバッグを漁り始めた。そして、丁寧に赤色の包装紙に包まれた何かを取り出した。

「比企谷、この前はありがとう。遅れちゃったけど、お礼受け取って欲しい」

「いや、いいって。そんな大したことしてねぇし」

「本当にっ――！」

初めて聞いた川崎の大きな声に、八幡は目を白黒させる。

「――本当に、感謝してるから……」

倒錯的なまでのしおらしさは、かえって川崎の気持ちの大きさを八幡にまざまざと見せつけた。

「わ、分かった。じゃあ有難く頂くわ」

「……！　ありがとう、比企谷」

またいつもの川崎に戻る。最近、彼女と接していると、八幡は百面相を見せられている気分になっていた。

確認を取って、その包装紙を宝石でも手に取ったかのように丁重に開けると、中にビニール袋に包まれたお菓子が入っていた。

「これ、カップケーキか？」

「そう。家で美味しいって評判だから持ってきた。あんま日持ちしないから、できれば今食べてもらいたいかも」

「了解」

カップケーキを中から取り出すと、焼け目が薄茶色に裾野のように広がっていて、芳ばしいフルーツ由来の匂いがほんのりと漂っている。元来の甘い物マニアの八幡としては、それだけで唾液腺が刺激さ

れる。
ちょうど小腹も空いていたから、口内の至る所から溢れ出る唾をぐっと飲み込み、
「いただきます」
口を開いて、その膨らんだ薄茶色の部分に齧(かじ)り付く。
「うまっ……」
口に入れ、ふわりとした生地を一度噛んだ瞬間に、美味しさの波動がじわりと口の中に広がった。本当に美味しいものを食べた時には、きっと上手く形容することができない。八幡はそれを感じながら、ただ美味という快楽に弄(もてあそ)ばれるしか無かった。
「美味い。めっちゃ美味い」
ひと口、ふた口と止まらず、あっという間に平らげてしまった。
「ごちそうさまでした。美味すぎた。これ何処の店のカップケーキなんだ？」
「ふふっ、あははっ……！」
「え、なんか面白いことあったか？」
「いや、あんた美味しい顔する時、すごい間抜けな顔するんだなと思って」
「は……？！」
八幡は蕩(とろ)け落ちてしまっていた頬を両手でまさぐる。
「そんな事ないよな……？」
「ふふっ、今まで気付かなかったんだ。あんた幸せもんだね。そうい

えば、お店は――」

川崎は未だに微笑みを湛(たた)えながら、悪戯(いたずら)っぽく人差し指を立てて、鼻先に当てた。

「――お店は秘密。数量限定の店だから、言い触らすとあたしが買えなくなる」

「そりゃあ無いぜ、川崎」

「あたしだけじゃなくて、これは家族の死活問題だから許して」

まもなくして、川崎はかなり年季の入った自転車を駐輪場から引っ張り出した。

「じゃあ、あたし帰るから。この後行かなきゃいけないところもあるし」

「おう、ありがとな、川崎。このカップケーキマジで美味かった」

「どういたしまして。あ、あと言い忘れてた」

「ん？」

八幡に微笑みかけた。またあの優しく柔らかい顔だ。

「日曜日、楽しみにしてる」

夕日はその美麗な陰翳(いんえい)を穏やかに掘り起こす。通りすがりについ見返すような美人であることは百も承知だった。ただこうして目が釘付けになるほど、吸い込まれるほどの美貌であることは、きっと通行人Ａには分からないのだろう。

「お、おう。じゃあな」

「うん、じゃあね」

急ぐ川崎はそそくさと自転車に乗って、走っていってしまった。黄昏時の微風はその目印のポニーテールをメトロノームのように等間隔で遅いテンポを保ちながら揺らしている。それよりも少し速い八幡の鼓動は、確かな熱を帯びて、全身の隅から隅までを駆け巡っていった。

そして、その熱が、黒く濁った泥混じりの氷床によって澱みきっていた心が溶かして透き通っていくような感覚があった。

――川崎と別れた後、八幡は全速力で自転車を漕いでいる。手探りの記憶で、慣れない道を右に左に曲がっていく。慣れない運動で心拍数は思いの外、高まっている。バクバクという音よりも速くペダルを漕ぐ。十数分漕ぎ続けて、ようやく視界に由比ヶ浜が入ってきた。

家路に着く彼女の姿は、心做しか歩調が遅く、前屈みになっているように見えた。彼は彼女の往く方向に先回りし、呼びかける。

「はーはー、由比ヶ浜っ……！」

「ひゃいっ！　……って、え、え、何ぃっ?!」

あのお化け屋敷で幽霊を見た時のように、由比ヶ浜は悲鳴に似た一際甲高い声を出して、数歩後退った。

「ヒッキー?!　は、ちょっ、なんでっ……?!」

「はーはー、ちょっと待て、今伝える」

八幡は暫く呼吸を整える。彼が息を吸う度に、揺れ動く自転車がどれだけ彼が力を使ったかを体現している。

「待たせた。用件ってのは、さっきの事だ。実際、別に大したことじゃないことはないんだろ。わざわざ『週明けに伝えるから』だなんて、メールとか電話じゃなくて直接口で言うことなんだと感じたしな」

「あははー、ヒッキーにはお見通しって感じだね……」

「じゃあ伝えるね」と、いつもはちょけている大きく可憐な円(つぶ)らな瞳に、似つかない剣幕を添えて、由比ヶ浜は宣言した。

「――私も生徒会長選挙に立候補することにしたの」

「は、マジで？」

「うん、マジで」

流石に構えていた八幡もこれには当惑して、二の句が継げなかった。

「分かってる。ゆきのんに言った時もそんな顔だったし、ヒッキーも困らせちゃうかも、……ううん、困らせるって。でも、こうすることが一番いいと私は思った。二人みたいに頭良くないから、証拠とかは並べられないけど――」

由比ヶ浜は須臾(しゅゆ)の間もその真剣さを帯びたままだった。

「――私、この部活を守りたい。いや、守るよ。だってこの部活が好きだから」

自らの意志を宣誓しきった由比ヶ浜だが、その様相は晴れやかでは無い。今のような傍若無人(ぼうじゃくぶじん)さは水性のようにすっかり注ぎ落とされていた。

「……だから、ヒッキー、ごめんね。こんな大変なのに」

その正体は八幡に対する申し訳なさが残っているようであった。どこまでも他人を思いやる、まさしく聖母のような由比ヶ浜らしい不安であった。

確かに彼女の行動には論理的破綻があるかもしれない。合理性が

無いかもしれない。もはや奉仕部の決壊に繋がる詰みの一手かもしれない。だが、彼は十分に納得した。

きっと由比ヶ浜にも思うところは色々あって、色々考えていたのだろう。恐らく彼女のことだから、一色いろはが相談を持ちかけ、奉仕部の対立が見え始めたあの日から、寝床に着くぐらいまで最善策をずっと考え続けたのだろうと、彼には推察された。そして、今回、雪ノ下が立候補するとなった上で、由比ヶ浜に残された選択肢から、最善策を選びとったのだろうと。

だから、そのような意志を否定できる要素は介在していなかったのだ。

「――あぁ、分かった。じゃあ勝負だな」

「へ、いいの……？」

「当たり前だ。何だ、負けるのが怖いのか」

茶化すや否や、由比ヶ浜の瞳の虹彩（こうさい）が確かに色を取り戻した気がした。

「――うんっ、勝負だ！　私、結構勝負強いからね！」

「いやぁ、その学力で総武高に受かった由比ヶ浜さんが言うと説得力が違いますね」

「えっへん、でしょでしょー！　……って、むっちゃ馬鹿にしてないっ……?!」

河豚（ふぐ）のようにぷくぅっと顔をぱんぱんに膨らませ、「もう、ヒッキーのバカッ……！」と由比ヶ浜は幼子のように拗（す）ねる。

「というか、さっきチョー怖かったんですけど。怪我してたらどうするつもりだったんですかー」

猫のような優しいパンチを八幡の肩に向かって由比ヶ浜は繰り出

す。ただその顔は憑(つ)き物が落ちたかのように綻(ほころ)んでいた。パレットの中の絵の具の色のように、ころころと思いもよらぬものに変わる作られていない表情を修学旅行ぶりに見た気がした。

「いや、悪い。後ろから声掛けた方が驚かせると思ってな」
「あ、気遣いだったんだ?! ふふっ、阿呆みたい！」
「そうだ、不器用なもんでな。じゃあ、俺はそろそろ帰るわ」
「ヒッキー、わざわざ来てくれてありがとっ……！ 本当に嬉しかったよ……！ ヒッキー、また月曜日ねっ！」

久しく見れていなかった、あの季節外れの満開の桜のような笑顔だった。間違いなくそれは、街灯の下で一等輝いて綺麗に咲き誇っていた。

そして由比ヶ浜は、離れていく八幡に向かって、とても大袈裟に、どこまでも手を振っていた。

――夜道を自転車で漕いでいく。一閃の光が闇を裂くように。ゆっくりであるが、確かに進んでいる。

何も解決していない。むしろこれから始まることは、八幡は重々承知であった。しかし、これから始まることを認識できたことが、一番の進歩であった、と極めて落ち着いた思考でその答えに辿り着くことができたのだ。

だから、あの時、思考の沼に陥(おちい)りそうだった彼を、文字通り首根っこから引っ張り出した彼女にこの言葉が自然と漏れ出ていた。

「本当にありがとう、川崎――」

その言葉は闇夜に熔(と)けて、彼女の元に届くことはない。だがその気持ちは、彼の中で確かな質量を持って残り続けることになった。

# 四話：　似たもの同士

家はすっかりもぬけの殻になっている。　両親は二人とも、地方に出勤しており、家を留守にしている。小町は起きた時には既にに家を出ており、書き置きやメール、ＬＩＮＥでのメッセージなども特になかった。八幡は修学旅行の後のあの日以来、彼女とずっと口を聞いておらず、それまでの関係がまるで嘘であるかのように間隙を生じたままであった。

勿論、八幡に非があることも重々承知していたが、意固地になっているというよりは、すっかり機会を逸してしまいるという形だ。

正午をすぎて、昼食をインスタントで適当に腹を満たすと、そろそろ約束の時間に迫っていた。

「いってきます」

何も返さないのは寂しいと感じたのか、白地に灰色の縞を持つサバトラの飼い猫―カマクラが甲高い鳴き声をあげて、八幡のいる玄関まで近づいてきた。

「にゃあご」

「そうかそうか、お前は見送ってくれるんだな」

しかし、カマクラは八幡を離すまいと彼の足に寄って、その小さな体躯を擦りつけてくる。甲高い声で鳴き続け、その可愛らしい真ん丸の瞳で見上げてくる。

「にゃあ」

「……餌が欲しいってことね」

八幡が履いた靴を脱いで上がると、尻尾がぴんと垂直に立つ。これは嬉しさをあらわす猫の仕草だった。
餌を与えたあとは猫に木天蓼（またたび）というように、すっかりそのキャットフードに夢中で、「お前は呑気（のんき）でいいもんだな」と嫌味をぼやいても、八幡が玄関の扉を開けても、歯牙（しが）にもかけることはなかった。

――最近の社会は猛烈な勢いで、利便性が増している。今では厄介な道案内をこのスマートフォン一台がしてくれているのだ。交通量の多い大通りに出ると、いつも向かっている高校の方とは逆の方向に向かって進んでいく。いくら千葉市民とも言えど、滅多に足を運ばない住宅街の方は、全くの不案内であった。
十五から二〇分ほど歩くと、目的地に到達した。辺りを見回すと、そこに『川崎』の表札が見てとれた。冷静に考えると、これが人生で初めての同級生の女子の自宅訪問になるのだ。この訪問には色気もへったくれもあるものではないが、その事実だけで、このインターフォンのボタンを押すのはいくぶん気が引けた。
そうして尻込みしている八幡を、「はーちゃんっ……！」と突然目の前のインターフォンが呼びかけた。
彼は言葉には表せない素っ頓狂（とんきょう）な声を出して、すっかり怯（ひる）んでしまった。すると今度は、無邪気な笑い声がインターフォン越しに聞こえてきて、

「はーちゃん、おどろいたっ?!」
「け、けーちゃん?!」
「はーちゃんのことずーっと、まどからみて、いまかなー、いまかなー、ってまってたの」
「あ、そうなの。めっちゃ驚いたよ」
「やった！」

「まってて、いま、あけるね！」とどんどん小さくなっていくインターフォン越しの天使の声を聞くと、思わず頬が緩み始める。やがてその

目と鼻の先の玄関の不透過硝子(ふとうかガラス)に滲(にじ)んだような影がちらついた。影がもぞもぞと蠢(うごめ)くと、ドアが勢いよく開けられて、目が合うと開口一番、

「はーちゃんっ……!」

ドアノブを頭の位置で握って、笑顔でこちらを燦々(さんさん)な笑顔で迎える川崎京華(けいか)の御姿はまさしく大天使そのものであった。その小さな頭の上には、黄色の輪っかが回っているように見える。思わず浄化して、この世から召されてしまいそうになる魂を必死に引き留めて、小ぶりに手を振った。

「こんにちは! それと……、えっと、いらっしゃいませ……!」

「けーちゃん、こんにちは。ちゃんと挨拶できて偉いな」

京華は何かを求めるようにその円(つぶ)らな瞳で見上げてきている。妹を持つ彼にはどこかその要求は懐かしく、可愛らしい。自然と手が小さな頭の方へと伸びていた。

「偉いぞ、とても偉い」

「えへへ……」

掌(てのひら)を開けば収まってしまいそうなほどで、撫でるとふわふわした髪の感触が伝わる。だが目を細めて、八幡の手を受け入れる京華の姿に、ここ最近口を聞けていない妹を自然と重ね合わせてしまっていた。

「あれ、どうしたの、はーちゃん。……いてっ」

「さっき、はーちゃんをびっくりさせた仕返しのデコピンだ。隙を見せてしまったな、けーちゃん」

「むむぅ、けーかもしかえしのデコピンするっ……!」

「はーちゃんの身長が高いから、けーちゃんにはできないな」
「むむむぅ！　はーちゃんのいじわるっ！」

戯(じゃ)れ合っていると、まもなく居間の奥から、「いらっしゃい」と、川崎がやってきた。

いつもと違い、その長い髪を下ろしており、白のフリルブラウスにかかるほどまで垂れ下がっている。その髪先が塒(とぐろ)を巻(ま)くように落ち着く、その胸元は女性的な豊満さを暗に示している。一方、ダメージが疎(まば)らに入っている細身のジーンズが通るほど、脚が細く長く伸びていた。彼女のスタイルの良さは折り紙付きだとは当然感じていた。ただこのようなラフな私服姿を見ると、その均整(きんせい)のとれたスタイルが強調されている。一介の健全な男子高校生である八幡にとっては最早目に毒のレベルであり、意識をしないようにと意識するしかなかった。

「……何、なんか変？」
「いえ、別に。当たり前だが見慣れない格好だなって思っただけだ」
「あ、そう。今日は来てくれてありがと。とりあえず家(うち)に上がっちゃって。けーちゃん、はーちゃんを案内してあげて」
「はーい、じゃあ、いこっ！　げんかんえきをしゅっぱーつ、しんこーっ！」

上機嫌の京華に手を引かれて、川崎家の上がり框(かまち)を踏みしめる。川崎のはーちゃん呼びに隔靴掻痒(かっかそうよう)の感が込み上げてくるが、京華の前という事もあって致し方ないのである。

「じつはね、けーか、あした、えんそくなんだよ！」
「へぇ、それは楽しみだな」
「うんっ！　はーちゃんにもあえたし、たのしいこと、いっぱいだよ！」

京華と話す度に八幡は浄化されていく。やがて、この目の腐りさえも消えていきそうな程だ。

川崎家は、外観はごく普通の一軒家であったが、家の中も生活感があり、やはり兄弟の数が多いということで、子供用の遊び道具が詰められたダンボール箱や、絵本や図鑑がぎっしり並べられた本棚があった。その奥の居間には一家団欒(だんらん)を囲めるほどの木製の大きなテーブルが置いてあって、そこに川崎はいた。調理台のところに立って何やらいそいそと準備をしている。

「はーちゃん、りびんぐえきにとうちゃーく」

「おぉ、ここが川崎家のリビングかぁー」

「ありがと、けーちゃん。比企谷、今、お茶用意してるから。どこでもいいから適当に座っておいて」

「お茶か、助かる」

間もなく温かい焙(ほう)じ茶、加えて「こういうのしか無いけど」と蓋で閉じられた湯呑みが出てきた。その蓋を開けると、白い湯気の中から卵黄の色が鮮やかに光る料理ができたのだ。

「え、これ、茶碗蒸し……？」

「そ。あたしが作ったやつなんだけど、食べて貰えらたらと思って」

「手作りなのか。川崎、料理得意なんだな」

「まぁ、これは簡単だから。時間がある時は作ってるって感じ」

「おぉ、すげ。ありがたくこれも戴(いただ)くわ」

手を合わせて、「いただきます」と一言。早速茶碗蒸しの中にスプーンを差し込むと、その弾力がそれ越しに伝わる。それをこぼれないように慎重に口に運ぶ。それはものの見事に、すぐに腔内(くうない)で蕩(とろ)ける。八幡は決して美食家では無いから、一々評価したりだとか、風味や味付けなどを気にかけることは無い。だからこそ、単純に、そして反射的に「おぉ、うめぇ……」という言葉が漏れ出ていた。

「ふふっ、それは良かった。結構茶碗蒸しは自信作なの」

そう言う川崎の顔は、柔らかで、慈愛に満ちていた。八幡が思わず見蕩れてしまうあの魅惑的な微笑みだった。それは隣で「おいしいおいしいっ！」と素直に表現しながら、ばくばくと食べる京華にも向けられていた。

「……マジで美味い。本当に美味しい茶碗蒸しってこんな味なのか」
「それは褒めすぎだって。煽(おだ)てても何も出てきやしないよ」
「いや、俺が何か出すレベルなんだけど。すげぇよ、川崎」
「……そ、そこまで言われたら、仕方ないからそう受け取っておく」

隣の京華がいち早く食べ終わったようで「さーちゃん、ちゃわんむし、おかわりっ！」と声を挙げたが、晩御飯が食べられなくなるからまた今度と窘(たしな)められてしまい、やや拗(す)ねてしまっていた。

「そういや川崎、今日は、どんな感じの予定にするんだ」
「けーちゃん、比企谷と遊ぶこと凄い楽しみにしてたから、近所の公園にでも連れてって、そこで遊んでもらいたいなと思ってたんだけど、どう？」
「オッケー」
「ありがと。後、その前に買い物行きたいんだけど、それで良い？」
「お易い御用だ。こんな美味しい茶碗蒸しも戴いたしな」
「じゃ、もう出よっか」

針の音を刻んでいる鳩時計を見るとすでにお天道様が下がり始める三時。川崎は少し準備すると言って、部屋を出て京華を連れて二階の方へと上がって行った。しばらくリビングで待っていると、「お待たせ」と声が掛けられる。川崎は長い髪の毛をいつものように後ろで束ねたようで、更にブラウンの格子縞のシングルブレストコートを一

枚羽織っていた。一方京華は、不自然に両腕を後ろにして、八幡の視線をいちいち確認しながら、部屋に入ってくる。

「いやいや全然待ってないけど……」
「じゃ、けーちゃん、はーちゃんに」
「うん！」

不自然だった両腕を前に出すと、そこには編み込まれた赤いマフラーがあった。

「これ、あげるっ！」
「え、マフラーくれるの？」
「最近、けーちゃん、マフラー作りに凝ってて。ね、けーちゃん」
「うん、マフラーつくってるの！　つくったやつは、パパとかママとかさーちゃんとかにあげてるんだよ！」

八幡が浮かび上げたのは、極寒の雪景色の中、外出できないからと、薪が焚べられた暖炉で暖を取りながら、前後に揺れる椅子で大切な人のために編み続ける女性の姿だった。それは園児で、まだ手先が拙いであろう京華に作るには難しそうだと感じた。

大変ではないのかと川崎に話を聞くと、糸を編み込んだリリアンを作るための機械がかなり手頃な価格で買うことができ、それが園児にも扱えるほど使いやすいものだということだった。

「手作りで作るなんて凄いな、けーちゃんは」

八幡が再び頭を撫でて賞賛すると、「ふふーんすごいでしょ」と言わんばかりの見事なまでのドヤ顔を見せつけて、「はーちゃん、首に巻いてみて！」と強請ってきた。八幡は立ち上がって、そのマフラーを慎重すぎるほど丁寧に首に巻く。

「どう、似合うか？」
「おぉ、すっごく、にあってるよ！」
「うん、はーちゃん、格好よくなったね」
「そ、そうか」

もちろん京華に合わせるためだとは分かっているが、川崎の言葉には意識せずにはいられなかった。

「けーちゃん、ありがとな。大切にする」
「じゃあ、プレゼントも済んだし、とりあえず行こっか」
「ちょっとまってね！」

京華は急ぎ足で部屋を出ると、ドタンと階段を駆け上がる音が聞こえてきた。しばらくして、京華の手には昔懐かしいフィルムカメラが握られていて、

「これで、かっこいいはーちゃんのこと、けーかがとってあげる」

八幡がまさかモデルになるとは露(つゆ)にも思わなかったが、そこに拒否権は無い。

「さぁ、おはじめます。はーちゃん、よろしくおねがいします」
「よろしくお願いします」

恐らく見様見真似で覚えたであろう、そのぎこちない敬語とカメラを構えたポーズ。そして、そのまま撮影会は始まった。
「おぉ、いいぽーずだね！」「はーちゃんいいよー」と撮影現場を映すテレビでよく見る掛け声を、京華は繰り返す。ただ園児ということもあって「もうすこしがんばって、さぁ、いなばうあー」とイナバウアーさせられてしまい、川崎の失笑を買ったりしてしまったりした。
京華の撮影会は意外にも恙(つつが)無く進み、最終的には彼女が満足する

まで続けられた。

「はい、おしまい！」

「どうだ、はーちゃんを格好良く撮ってくれたか？」

「うん、ばっちり！」

京華は至極御満悦といった感じであった。そして、カメラを仕舞うために、部屋を出ていくと、再びドタドタと足音を大きく鳴らして階段を上る音が聞こえた。

「あの子、最近、あたしが買ってるファッション誌も知らない間に読み始めてて」

「なるほどね、じゃあ、川崎もモデルになってるのか」

「うん、しょっちゅうね……」

児童の興味の広さとその傍若無人なほどの行動力には魂消るばかりであった。その後、現像された川崎がモデルの役の写真が、戻ってきた京華によって八幡に公開されそうになり、川崎は見せまいと死に物狂いで隠していた。

▲▽▲▽▲▽▲▽

「おかしのところいってくる！」

「分かった。後で迎えに行くから、けーちゃん、そこから絶対に離れちゃだめだよ」

「はーい！」

近くのスーパーに辿り着くと、川崎は野菜コーナーで真剣に商品に目を向け始めた。カートを引きながら、物色する様は、良い意味で高校生には見えないある種の貫禄があった。トマトが並べられたところでは、一つ一つを手に取って、まるで鑑定士のようにしげしげと

吟味(ぎんみ)している。ただ、その様子を見て、八幡はふと疑問に感じた。

「ん、これとか真っ赤なのに、良いのか」

「うーん、トマトって赤くて熟しすぎるのは酸味がなくなっちゃってベストじゃないの」

「へぇ、そうなんだな。じゃあこれとかは？」

「あ、それいいかも」

八幡からそのトマトを受け取った川崎は、しばらく舐めまわすように見た後、軽く縦に首を振って、「よし、これにしよ」と慣れた手つきでビニールに包んで、カゴの中に入れた。

その後も野菜コーナーでは川崎鑑定士が見極めを行っており、八幡も助士のような役割で、良い野菜の見分け方の知識を実戦形式で吸収していった。例えば、根深葱(ねぶかねぎ)は白と緑のコントラストがはっきりしているものが瑞々(みずみず)しくて良いらしい。そもそも葱の種類が色々ある事を知らなかった八幡にとっては知見が広がるばかりであった。

他のコーナーも一通り回ると、カゴの中身は既に鮨(すし)詰め状態で、窮屈になっていた。彼女の家は四人兄弟の大所帯であるから、これだけの物を買う必要があるとの事だった。

「ありがとね」

「凄いな、川崎。他の人もそんなにじっくり見てないのに」

「まぁ、そういうの眺めてるのが好きだってのもあるんだけど、少しでも味を美味しくしたいから。家でも言ったけどあたしかなり料理好きで、夕飯とかも作っちゃうぐらいだし……」

「……単純な疑問なんだが、何でそんな料理好きなんだ？」

「分かると思うけど、あたし小さい頃から人を笑わせるのとか凄く苦手だからさ。それで、最初、お母さんの手伝いで作った簡単な料理を食べてもらって。その時、みんな凄く柔らかい顔になって、それがたまらなく嬉しくて、今でも作るって感じ」

最初の鮮明に残っているであろう食卓の光景を思い出したのであろうか。きっかけを語るその顔には懐かしさに浸っているような温かい面持ちになっていた。

「なるほどな……」

本当に家族の事が好きなのだと感心している八幡であったが、川崎はどうやら勘違いしたようで、いたく物憂げな様子で、

「ひ、引いてる……？」

「え、俺が……。ぷっ、あははっ……！」

違うと手を振って否定すると、川崎は愁眉を開いたように安堵のため息を吐く。

「過去一の感心顔だったのに、引いてる顔に見えるって、俺ったらどんな顔ですかね」

「ち、違うから……」

「……でも、それはあれかもな。川崎も笑顔だからだろうな」

「き、急に何言ってんの」

「学校でもその顔してれば、ボッチでは無かっただろうなと思うほどには良い顔だと思うぞ」

「ほ、ほんとに何言ってんのっ……！」

栃麺棒を食ったような慌てぶりを川崎は見せ、「は、早く、会計しなきゃ」と逃げるようにカートを押し進めていった。確かに八幡自身もかなり恥ずかしい事を言っている自覚があった。由比ヶ浜ならまだしも、雪ノ下にはこのような気気障な発言をできないだろうし、きっと「洒落にならないほど気持ち悪すぎるわ」と冷えきった言葉を木で鼻を括ったような態度で返されるのが目に見えていた。

ただ川崎には、最近接する機会が増えつつあることで、言われ慣れ

ていないのか、このような真正面からの褒誉(ほうよ)の台詞(せりふ)に弱いと薄々感じていた節もあり、もちろん本音でもあるのだが興味本位で試してみた部分も大きかった。ただ川崎の様子を見て、謎の満足感もあり、これまでの経験上、マゾヒスティックな性質(たち)かと感じていたが、意外とサディスティックの気も見つけることができたのだった。

川崎に追いつくと、なぜかカゴの中身を見ており、眉根(まゆね)を寄せて、難しそうな顔をしていた。八幡も見てみると、お菓子コーナーの棚の近くには寄っていないはずなのに、いくつかお菓子が入っていたのだった。

「ん、どうした……？」

「このお菓子、何か知ってる」

「いや知らない」

二人はお菓子コーナーに向かった。そこには、お菓子をずっと眺めている京華の姿があった。

川崎に呼びかけられた京華は、カゴの中から取り出されたお菓子を見るや否や、露骨に顔を歪めた。そこからすぐに右顧左眄(うこさべん)と目を動かして、口をもごもごとさせ始めた。彼女が犯人であることは間違いがなかった。

「さ、さっき、えっと、その、ようせいさんがもってきて、いれてた……」

「そうなの。じゃあその妖精さんは今、どこ？」

「え、えと……。もう、いなくなっちゃった……」

「そっか、じゃあこれは返さなきゃね」

「あ……」

もう白(しら)を切ることはできまいと悟ったのか、京華は両手を固く結んで震わせながら「ごめんなさい……」と小声で謝った。

「……何で、入れちゃったの？」

「その、あした、えんそくあるから、おかしを、もっていかなきゃいけないの。でも、さっき、ちゃわんむしたべちゃったから、おかしかってくれないかもって」

俯きながら、詰まりながらもしっかり理由を述べる京華に対し、川崎はしゃがみこんで、目線を京華のそれに合わせると、やけに強ばらせていた顔も、テグスの糸を切ったかのように解けさせて、ほほ笑みかける。

「けーちゃん、ちゃんと言ってくれてありがとね。さーちゃんもすっかり遠足のこと忘れてたごめんね。でも、今度から入れる前に言うこと、嘘をつかないこと。さーちゃんと約束できる？」

「うん……。やくそくする」

「じゃあ、さーちゃんもけーちゃんも忘れない為に、これしよっか」

「うん。さーちゃんもわすれちゃ、だめだから。けーかにうそついたらだめだから」

「それは困るかなぁ」

「え！　さーちゃんだけずるいっ！」

「嘘だよ、けーちゃん」

悪戯っぽく笑う川崎に、京華はそのやわっこい頬を風船のようにぱんぱんに膨ませて、

「あぁ、うそついた！　ずるいっ！」

「けーちゃん、早くしないと、さーちゃんは嘘をつき続けるぞ！」

「はっ！　はーちゃんのいうとおりだ……。はやく、これっ！」

必死だからこそ振り回されてしまう京華の様子に耐えられなくなったのか、川崎は失笑してしまった。

「うん。分かった。いいよ」

小さく丸っこい小指と、しなやかで細い指。それらが絡まり合い、やがて朗らかな声で指切りげんまんを交わす二人を八幡は口角が上がっただらしない顔で見ていた。　このような日常の仲睦まじい姉妹の姿は、中々フィクションでは演出することができない。だからこそ、癒されるうえに尊さすらも感じることができた。
だが京華が八幡とも約束することを言い出し、指切りをすると京華は川崎と八幡も二人で指切りするように求めてきたが、「もう既に約束してるから」と子供を悲しませない嘘をついて断った。

「……あとで針千本用意しておかなきゃだな」
「ふふっ、本当に。すぐに約束破っちゃったね、あたし達」

二人して笑いながら、真剣な表情でお菓子を選ぶ京華を眺めていた。ただそこで、彼女はたくさんお強請りして、再び川崎に注意されてしまうのであった。

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「うわーいっ！」

買い物を終えて、スーパーを出ると、住宅街の一角にある公園に向かった。そこはテニスコート三面分ほどの広さがあり、住宅街にある公園の中ではかなり大きい方であった。そこには遊具一式は一通り揃ってあり、京華は到着すると矢も盾もたまらず、ブランコに目掛けて走っていく。

「けーちゃん、気をつけて」
「うん、わかったっ……！」

とは言いつつも、やはり走って、ブランコに目がけて走っていって

しまった。川崎は「はぁ、もおまったく」と溜息を吐きながらも、苦笑いを浮かべていた。一方、遊ぶ気が満々であったものの、すっかり置いてかれてしまった八幡は呆然としていた。

「あの子、最初はあんな感じで一人で遊びたがるから、ちょっと待って。しばらくしたらお呼びがかかると思うからその時遊んであげて」

公園のベンチに八幡は腰を掛けて、食材等が入ったエコバッグを横に置いた。隣には川崎が座る。ただ、その二人の間には傍から見て恋人とは勘違いしないような、確かな距離が空いている。

「荷物持つの手伝ってくれて、ありがと。すごく助かる」

「いいのいいの。俺が男手として活躍する機会中々無かったから、むしろ鈍るの防げて、助かったわ」

住宅街に佇むからこそ、騒音とは切り離されており、子供たちの賑やかな声だけが聞こえてくる。

清々しいほどの秋晴れということもあって、絶好の行楽日和であった。

擽るような微風が、頬を撫でていく。木々が穏やかに音を立てると、一枚の薄く朱が混じる円い葉が、それこそひらひらと踊るように落ちていく。

「なんか、いいな。こういうの……」

「あたしもこの時間好きなんだ。退屈なんだけど、良い退屈っていうか」

「凄く分かる。分かりすぎる」

この感覚は、学校の中でも八幡は感じていた。言うまでもなく、ベストプレイスである。三段程度しかないコンクリートの階段。すぐ横のテニスコートから届けられるラケットの快音。昼間に足繁く通

う海風に身を任せて、ゆらゆら揺れている通路脇の草花。
そこでもう一つ気づいたことがあった。
「この雰囲気、屋上に似てるよな」
「それを言うなら、えーと、あんたがよく居るベストプレイス、だっけ。あそこにも似てる」
一瞬、目が合って、そこでまた、二人揃って吹き出してしまった。
「つまり、俺たち似たもの同士って事ですか」
「うん、そうかも。前から思ってたけど、相当似たもの同士、だよね、あたし達」
以前からボッチであったり、どちらも一家の長子でブラコン・シスコンであったりと似たもの同士だとは分かっていたことだった。だが、こうして共有して確かめ合ったことで、妙に心が踊るような心地になった。そこからは世間話やらなにやらで談笑していた。
「そういや、スカラシップとかも取れそうなのか？」
「うん、お陰様で。本当ありがと、比企谷」
「比企谷には助けられてばっかりだね」と、その横顔を隠すように下ろされた横髪の先を手櫛（てぐし）でなぞりながら告げる。
「でも、それを言うなら、助けられたのは俺の方だ」
「え、あたし、何かしたっけ……」
「最近、色々あってな。こんな感じで思い切り羽伸ばせてなかったからな。久しぶりだ。こんなに楽しいの。こちらこそ誘ってくれてありがとうって感じだ」
その時、明らかに川崎の顔つきが変わった。こちらを見て、一瞬

逡巡(しゅんじゅん)した様子を見せたが、すぐに切り替わって、

「……それって、修学旅行の事でしょ？」

川崎の口から修学旅行の話題が掘り起こされるという予期せぬ事態に、八幡の眉間(みけん)には皺(しわ)の波が立った。八幡は言葉に出さなかったものの、無言の肯定と取るには十分すぎるほどだった。

「やっぱり」

「……何でそれを？」

「あの時の比企谷の顔見れば誰でも分かる。その後にあんたが海老名に告ったって話、あたしのところにまで流れてきたから。それで一応海老名にも聞いて、一部始終を」

「そうか……」

ここ最近、川崎と接する時は、気楽で、気軽で、心地よかった。しかし、そのような感情が湧き上がるということは、川崎を思い出さないための都合の良いシェルターとして利用してしまっていることにほかならなかったのだ。それは修学旅行のことだけではなかった。その後の奉仕部との二人のこと、雪ノ下陽乃の思惑、葉山隼人の同情、そして不和が続いている妹の存在、全てから逃げるために、何も負の感情を抱かずに済む川崎を利用していたのだ。

嘘の告白で傷つけた自覚があるにもかかわらず、二度目の彼女に対する過ちを八幡は犯そうとしているのだ。喉元に鋭い刀を突きつけられたように、自らの愚かさをまざまざと直視させられていた。

「……やっぱり比企谷は一人で抱え込みすぎ」

反射的に赤らんできた雲がひとつもない秋晴れの空を八幡は見上げた。「そんなことはない」と直(ただ)ちに否定したいところだが、この一言は核心をついていた。罪悪感に浸りつつある今もまさにそうである。

そしてそれは、八幡が以前、川崎に放った一言でもあったのだ。所謂ブーメランということであった。

だからこそ、この極めて自分本位の罪悪感に浸った自己を彼女に悟られないためにも八幡はわざと「お前が言うか、それ」と揶揄いの言葉をかけると、

「あたしだからこそ言えるんだけど。一人で何でもしようとしてた時、比企谷に助けてもらったお返し。つまりお互い様ってこと」

「お互い様……」

そのお互い様という響きには、不思議と凝固してしまった心が解れていくような心地があった。これは葉山が差し向けた、否、下賜したともいうべき一方的な同情と八幡が受け止めたものとは全く違っていた。拒絶することなく、自然とその言葉を受け止めることができたのだ。

「だから、前も言ったけど、あたしを頼って。あたしにもあんたの背負ってるもの、背負わせて」

横を向くと、またあの柔らかく、全てを包み込むような慈しみに満ちた微笑みだった。

「似たもの同士なんでしょ、あたし達」

その言葉には、とびきりの抱擁力と優しさが詰まっていた。それで八幡の罪悪感が決して消えるわけではない。ただ猜疑心の強い八幡ですらも、川崎には身を預けられるような安心感が確かにあった。一方、恥じらう様子もなく言ってのける川崎の様子に、かえって八幡の方が照れくさくなってしまって、

「……はっ、何その、プロポーズ的なやつ」

と、意趣返しの言葉を呟いた。すると柔らかい顔のまま川崎は、茹で上がっていく蛸のように瞬く間に顔を赤くなっていく。

「プ、プロっ……。そ、そんな訳ないでしょ。馬鹿なんじゃないのっ……！」

その後も何かを取り繕おうとしては口ごもり、金魚のようになってしまっている川崎を見て、八幡は軽く吹き出してしまう。

丁度その時、一人で遊んでいた京華が、可愛らしい薄らとした眉を落として、やけに悩ましげな顔でベンチの方までやってきた。

「ね、はーちゃん」

「ん、けーちゃん、どうした。何かあったのか」

「うん、あのね。あれとってほしい」

京華が指を差す先には、脇に植えられている立派なハナミズキの木があった。かの有名な薄紅色の花ではなく、それが成熟したあの赤い実を取って欲しいとの事だった。

一生懸命あの実を取ろうとして、つま先が痺れるほど背伸びしたり、頑張って精一杯飛んでみても届かなかったり、でも取りたいから木に登ったりして、と幼い頃の朧気な記憶を八幡は思い出していた。だが不思議なことに手を伸ばせば容易に届くことになった今になっては、その実を取ろうともしなくなってしまっている。それどころか、子供の時のように遥か高いところにあるものを取るために、手を伸ばそうとしなくなってしまっていることにも気付かされる。

「――よし、良いだろう。やっとこの身長が活きる時がきたか」

「あたしはここで見てるからさ。目いっぱい遊ばせてあげて」

「おうよ」

「それと危険なことはさせないように」と注文が入り、八幡は首を縦に降った。ハナミズキの木の下までくると、辺りは落ちて潰されてしまったハナミズキの実がいくつかあった。そこで京華は納得のいかないような顔で、上を見上げている。

「せっかくならけーちゃん取りたいだろ？」

「うんっ、とりたい！　でも、けーかじゃとれないし……」

八幡は落ち込む京華を横目に、すっとしゃがみ込んだ。

「これでどうだ？」

軽く微笑んでやると、八幡の行動を直ぐに理解した京華の目は大きく広がり、言葉通りキラキラに輝き始める。

「それだ！」

「よーし、準備できたら言うんだぞ」

「うんっ！」

京華は逸(はや)る気持ちを隠すことなく、飛び乗るように肩に足をかける。そして、「じゅんびぃ、かんりょう!!」の元気な掛け声とともに、八幡はすくっと立ち上がった。

「すごいっ、たかいっ！　はーちゃん、たくさんとれるよっ！」

「次の人の分もあるから、残しておくんだぞ」

「わかった！　ちゃんと、のこすね！」

木にぶら下がっている赤く熟(う)れたハナミズキの実をいくつか採ることができて、京華は大変ご満悦なようだった。

そのままロボットごっこが始まり、パイロットの京華の意のままに八幡は決して狭くはない公園を駆け回った。

砂場では、小ぶりな山とその山の中をくり貫いてトンネルを作り、近くに置いていたバケツを借りて、水を汲んで、一級河川の『京華川』を作ってみせた。完成の際には、写真に収めたいほどの鼻を天狗のように伸ばしたドヤ顔を見せつけてくれた。

錆(さび)がところどころ目立つ年季の入った赤色の滑り台では、京華が逆走して登ろうとして、転んで滑り落ちてきたところを川崎に見つかり、「約束したでしょ」と二人ともども叱られた。

パンダの顔が左右両端に施(ほどこ)されたシーソーでは、八幡が乗った瞬間に訪れる浮き上がる感覚がよっぽど気に入ったようで、それを何回も繰り返した。

一頻(ひとしき)り遊ぶと、京華の服もすっかり土の色が浮かんで見えるほど汚れてしまっていた。手の爪の中には、砂が入っていて、いっぱい遊んだ証になっていた。八幡はすっかり綿(わた)のように疲れてしまって、縦横無尽に公園の中を駆け回った京華はまだまだ遊ぶ気満々であったようで、ぶうたれる様子を見て子供の体力に末恐ろしさを感じている。

そのような京華を川崎は夜ご飯という甘い罠を使って、手馴れた様子で釣り上げて、帰路についた。八幡も荷物を取りに帰るために一緒について行く。京華は大事そうに持っていたハナミズキの実をポケットに仕舞いこむと、丁度二人の間に納まった。両腕を広げて、それぞれの手を掴むようにと求めてくる。

そうして三人連なってできたのは、川の字というよりはアルファベットのエムの字になった凸凹の影だ。

京華は何かを期待しているように、やけに鼻息を荒くしている。川崎は小声で「京華に、飛ぶやつさせてあげて欲しい」と伝えてきた。

そう言えば、小さい頃、父と母に良くやってもらっていたな、と懐古の念に八幡は浸っていた。とうとう自分の番かと、ある種の感慨を混じらせて、「分かった」と返した。

川崎は「ありがとう」と優しく微笑んだ。彼女は軽く咳払いをした後に、聞き慣れない高い声を出して、

「こちらさーちゃん、緊急事態発生です！　前に障害物発見しました！　京華さん、どういたしますか!?」
「こちらけーか、だっしゅつをこころみるっ……！　さーちゃん、はーちゃん、ジャンプじゅんびっ……！」

京華の腕にぐっと力が入った。その瞬間、八幡と川崎は互いに目配せして、

「いまだっ……！」
「「せーのっ……！」」

その掛け声で、高く飛び上がった小さな小さなシルエット。遠くに伸びていった影。満足気な顔。「だっしゅつせいこうーっ！」の歓喜の声と共に、高らかな幼女の笑いが、長閑（のどか）な住宅街に染み入るように拡がった。

何度も大きなジャンプを繰り返して、慣れない八幡の腕が棒のようにくたくたになった頃、気付けば川崎の家に到着していた。

すっかり日没の時間を超えており、町の灯りがぽつぽつと斑（まだら）模様に、萌（も）え始めた。

「え、はーちゃん、もう帰っちゃうの……？」
「あぁ、もう夜になっちゃったからな。また今度な、けーちゃん」

到着して直ぐに荷物を取って、玄関に向かっていると、京華が後をつけてきていた。しゃがみこんで頭を撫でると、彼女のその真ん丸な稚（いとけな）い瞳が、一杯の涙で満たされていった。そのまま彼女は八幡の腕に飛びつき、動けないようにするために精一杯の力でしがみついてた。

「やだっ……！　はーちゃんともっといっしょにいたいっ……！」
「おいおい、けーちゃん。すごく嬉しいけど、そんなこと言ったら、

はーちゃん勘違いしちゃうからね。他の子とかには言わないでね」

八幡が遠回しに京華を諭そうとするが、むしろ逆効果であったようで、その涙漲る瞳に射抜かれてしまい、

「はーちゃんだけだもんっ……！」

と叫ばれてしまっては、元々妹属性に耐性が毛程もない八幡は、「分かった。はーちゃんもけーちゃんともっと一緒に居たい」とすっかり手篭めにされた。しかし、即座に彼の頭に軽い拳骨が繰り出され、「余計なこと言わないで」と川崎から咎められた。

「こらっ、けーちゃんもはーちゃんを放しなさい」

「いやっ……！　さーちゃんのいじわるっ……！」

今思えば、その窘める一言が、凶悪な最終兵器のトリガーだったのだ。

「はーちゃんは、今からお家に帰るの」

「じゃあ、パパとママみたいにはーちゃんと――」

次に紡がれる言葉は、自ずと理解できた。しかし、身構えても、もう遅かった。その銃口はゼロ距離で向けられている。

「――結婚するっ……!!」

八幡の意識は、遥か彼方へと消えた――。

――日がすっかり沈んでしまい、初めて通る道を、自転車を押しながら、街灯の明かりを頼りに、歩いていく。
彼の隣には道先案内人として、先を行くでもなく、後を着いてくるでもなく、横に並んで、同じ歩調で川崎が歩いていた。行きは分かり易い大通りを通ってきたが、この蜘蛛の巣のような入り組んだ住宅街の小道の方が早く帰れるという事だった。
元来寡黙（かもく）な性分であり、あまりうるさいのを好かない八幡にとっては、ただ黙々と歩くふたりの傍らで、一定のリズムを保った足音と、鉄錆が生み出す奇妙な自転車の音色が織り成す和音が妙に小気味よい。
ただ肌身に染み入る抗えない寒さは刻々と迫ってきていた。上に羽織る物も厚着を持って来てくれれば良かったと、後悔するほどには本日の夜の千葉は寒かった。夜の気温は十二月下旬並ということだった。
だからこそ、八幡は今、首元に巻かれている黒色のマフラーをプレゼントしてくれた京華に感謝している。

「けーちゃんがくれたマフラー、本当に暖かいな」
「うん、本当に」

川崎の首元には青色のマフラーが巻かれている。これも昨年の川崎の誕生日に、京華が編んでくれたものらしく、とても愛おしむ様に彼女はそれを撫でていた。

「そう言えば、この季節でよかったね」
「ん、マフラーだからこの季節だろ。実際、少し早いぐらいじゃねーか？」
「実は、弟の大志も京華からマフラー貰ってるんだけど、真夏にプレゼントされてて」
「ははっ、それは――」

「小町と関わった神罰だな」と口にしようとしたが、その言葉を口にしたら大志を罵った神罰が下りそうであったので、喉の奥に押し込んだ。

「見たかったな」
「ちょっと待って、今、丁度あるから」

川崎は携帯を開いて、写真フォルダを探し始めた。そこはしっかり分類されており、三人の弟妹の写真の総枚数は、画面の数字を見ると約三〇〇程度あるようで、そのブラコン・シスコンっぷりに八幡ですらも畏怖の念を抱くほどであった。
因みに大志の半袖にマフラーの写真はそこそこの面白さであった。

「あの子、すっかり比企谷のこと気に入っちゃったみたいだからさ。今日もたくさん遊んでくれて本当にありがとう」
「いやいや、俺も楽しかったし。たまにはこうして昔に戻って遊ぶってのもいいもんだな。すっかり忘れてたわ、あの感覚」

「そういえば」と八幡は、一呼吸おいて、

「モテるって存外大変なんだな。まさか二人にプロポーズされるとは。モテる奴恨んでたけど、これはこれで苦労するもんだ」
「あ、あれは違うって言ってるでしょ！」

結局、八幡は京華の唐突なプロポーズのあまりの尊さに、死の一歩手前まで及んでいたのだった。
何とか現世に戻ってきた時には、川崎に運ばれて既に八幡の自転車の目の前に就いており、そのまま帰路についたのだった。

「でも、京華大変だったんだから。アンタが上の空になった後も、最後

まで『さーちゃんだけ、ずるいっ！　結婚するから京華が一緒に帰る！』って駄々こねてたし」
「……なるほど川崎が、お義姉(ねえ)さんになるかもしれないのか」
「……あんた本気で言ってるの？」

恐らく今までで一番冷えきった目が八幡を突き刺す。切れ長の目はこういう時に凶器になり得るという、どこかの小説の一節にあったフレーズを思い出しては、誠にその通りだと肌身に感じた。

「冗談です、ごめんなさい。……でも、けーちゃんはモテるだろうなぁ。すごく明るいし、人懐っこいし、それに……」

思わず言葉に詰まった。川崎も怪訝(けげん)そうな顔で、八幡を見ている。

――川崎みたいに美人になるだろうからな。

いつもの彼なら軽い気持ちで言えたはずの一言だったが、突然喉元で引っ込んでしまったのだった。

「それに……？」
「いや、ずっとこのまま天使だろうし」
「何それ」
「実質保護者の隣で、将来とびきり可愛くなるとか美人になるとか言ったら、どつかれると思ったからな。『娘を狙う不躾(ぶしつけ)な男は許さん！』的な」
「……ば、馬鹿じゃないの。どつくわけなんて、な、ないし……？」
「何で疑問形なんですかね……」

かなり適当な事を言ったつもりだったが、その反応からして、この姉は本当にやりかねない。将来の京華にアタックする男達の事を考えると不憫(ふびん)で仕方がなかった。

まもなくすると大通りに繋がる道に辿り着いていて、その道の先には車の光が残像を残して消える瞬間が映し出されている。

「うし、ここまで来たらさすがに大丈夫だ。夜遅いのに悪いな、送って貰って」

「別に大丈夫。近くのコンビニに用があったし。それに、あたしが比企谷と一緒に居たかっただけだから」

妹の京華からつい先刻、聞いた言葉だった。川崎の軽妙なボケに、思わず口元が柔らかに歪んだ。

「ははっ、一緒にいたいって。けーちゃんに言ったことを復唱するが、そんな女子力高いこと言ったら、俺みたいな男子勘違いしちゃうから」

「うん、勘違いして。こんなこと比企谷にだけしか言わないから」

「はいよ、って、どういうこと……？」

てっきり八幡を揶揄って愉しむ小悪魔のような笑みを浮かべていると彼は考えていたが、振り返ったその顔には、巫山戯ているようには到底感じなかった。同じ言葉でも、京華のような子供の親愛を表す真っ直ぐな好意とも違った。

もし八幡が読んできたフィクションのラブコメディであったなら、たとえ両想いの二人であっても、ここでは勘違いというオチが定石であろう。それほど、あまりにも日常的で、唐突であった。

しかし、今ここはフィクションでは無かった。

「――私、比企谷のこと好きだから」

その言葉が紡がれた瞬間、二人だけが世界から切り取られたように、時が止まった。

「――――は……？」

簡単すぎる言葉の意味を咀嚼（そしゃく）するのに時間がかかる。ここまで真っ直ぐで、濁っていなくて、だからこそ信じ難い好意を示す言葉を、八幡は受け止めたことがなかったからだ。過去の積み重ねが生み出した防衛機制のようなものが、川崎の言葉の裏を探してしまっていた。

「あー、えーと、それはつまりあれか。文化祭の時の俺への仕返しか、いやその節は本当に――」

「比企谷が好き」

決して逃がさぬように、また、その真っ直ぐな言葉が、八幡の耳に届く。ただ受け止められるほどの器量は八幡にはなかった。だが、その単純明快な言葉は、虚飾（きょしょく）ではないとは理解できた。

「お、おう、そうか……」

たじろぐ八幡の様子を見て、次に川崎が放ったのは、「ごめん」と謝罪の一言だった。

「これはあたしの我儘（わがまま）。今の比企谷にこの気持ちを打ち明けたら、きっと困らせるって分かってた。でも、もう嘘はつけない」

続けて、川崎は言葉を紡ぐ。

「勿論、あたしの一方通行なのも分かってる。でも、答えは今出さないで欲しい」

しかし、それ以前に八幡はあまりの突然のことに、すっかり当惑してしまっていた。

「す、すまん、答えを出す云々以前に、ちょっと俺には分からないんだ。あまりにも急すぎて、な……」

「そ、そっか……」

「こういうの聞くの、本当に野暮なのかもしれないが――」

川崎の目は、まじまじと真剣に八幡を貫いている。嘘では無いと感じるからこそ、心の底から気に掛ることがあった。

「――その、何で俺みたいなやつの事を、好きになってくれたんだ」

すると、川崎はこくりと頷いて、滔々とその経緯を八幡に語り始めた。

「前、京華と会った時、あるでしょ。実はずっと気が晴れない日が続いてて、怖い顔になってたみたい。それで京華にも心配かけちゃって、泣かせちゃったりしたし」

顔を聊か歪めるが、その口が動かすのを止めることは無かった。

「比企谷とか雪ノ下に助けて貰った時から、実は家族で色々あってね。簡単に言えば、親とか大志とかの態度ががらっと変わっちゃってさ。時折『辛かったでしょ。負担をかけて、ごめんね。私たちの分まで背負わせて、大事な時間を奪っちゃってごめんね』って言われるようになっちゃって。その時、あたし物凄く罪悪感感じさせちゃったってた

んだって初めて気付いてさ。それに、家事とかバーテンダーの仕事も別に嫌いじゃなかったのに、あたしが嫌いなもの無理やり押し付けられてるように皆は感じてるんだっ、て――」

「でも」とやけに川崎は強調する。

「でもっ、比企谷は、比企谷だけは言ってくれた。『最初は無理してると思ってたが、今はそうは全く思ってない。だってら家族のこと考えてる時の川崎は、一番幸せな顔してるからな』って。それが凄く嬉しくて」

家族を何よりも大切にしている川崎。それゆえ、かえって家族はその川崎の表情の意味を知らなったのかもしれない。だからこそ、唯一理解して欲しい家族に、理解されなかったことが彼女の精神的苦痛になっていたのだ。

「あの時、本当に、本当に嬉しかった。救われた。比企谷は不器用なあたしのことこんなに分かってくれてる。そして一人で背負い込みすぎるなって頼らせてくれる。それに、比企谷と話すの結構、違う、物凄く楽しいし、気も合うし。気づいたら――」

丘陵なだらかな切れ長な目を微睡んだように恍惚とさせている。街の光は、まるで彼女がこの瞬間、世界の主役であるかのように照らし出した。その瞳の潤いすらも、反射する。

「――気づいたら、好き、でした……」

一刹那も、目が離せなかった。

あの普段はクールで無口な川崎が、夜の帳ですら隠せないほど頬を真っ赤に染めて、ここまでの感情、しかも好意をぶつけてきている。

八幡も男だ。陽乃は彼の事を理性の化け物と半ば皮肉を込めて、讃

えた。だが決して言葉に出すことは無くとも、らしくない川崎の姿を見て、本能的に湧き上がってくる感情を抑え込むことができなかった。

すっかりと八幡の顔は穴という穴から蒸気が吹き出るほど沸騰していた。心臓は張り裂けるほど、強烈な鼓動を打ち付けている。

「……」

「そっか、そういう顔してくれるってことは、少しはあたしを女として意識してくれてるってことだね。ふふっ、嬉しい」

その緊張が解けたような微笑みには、言葉通り純然たる喜びが混ざっているように思えた。八幡は相変わらず言葉が出ない。次第に酔ったような雰囲気からは醒めやらずとも、落ち着きを取り戻しつつあり、やがて照れ臭さが込みあげる。

それは川崎も同じであったようで、図ったように両者揃って、目を逸らした。

秋の夜長の沈黙が、暫く二人を支配した。

「……このことはあたしとあんただけの秘密だから。じゃあね、比企谷」

まだその頬に朱を遺したまま、いつもとは違い、胸元で手を小刻みに振った後、直ぐに川崎は駆け出した。

彼女を象徴する真っ直ぐ伸びた青いポニーテールは、あの時よりも速く、小刻みに揺れている。川崎の後ろ姿を、ただ茫然自失としながら見送った。やがて、夜の影へとその姿が飲み込まれていく。

生まれて初めて与えられた、純粋で真っ直ぐな掛け値なしの好意。相変わらず高揚している。紅潮している。だが八幡には、眩しすぎて、重すぎた。今、周りの外気に冷やされると、次第に視界が揺れ始めた。拍動も乱れ始めた。嫌な汗が吹き出し始めた。

ここで彼は気付いてしまったのだ。彼が傷つけてしまう大切な人

が増えたことに――。